

論壇

国際基督教
大学教授

森本あんり



不思議な由来

「幻なければ民滅ぶ」。これは、国際基督教大学（ICU）の初代総長であった湯浅八郎が好んだ言葉である。わたしも学生時代によく聞かされた。

この言葉は、旧約聖書『箴言』からの引用だが、その由来はやや複雑である。当該の

29章18節は、新共同訳では「幻なければ民は墮落する」、口語訳でも「預言がなければ民はわがままにふるまう」となっており、明治の文語訳でも「黙示なければ民はほしいままにす」である。つまりこれは、聖書を日本語だけで読む人からは出てこない言葉なのである。

では、英語の聖書はどうか。実は、現在の『新改訂標準訳』にもない。それは、17世紀以来使われてきた『欽定訳』聖書にだけ出てくる言葉である。「Where there is no vision, the people perish」これを日本語に訳したのが、「幻なければ民滅ぶ」である。

湯浅は、どこからこの言葉を仕入れてきたのか。おそらく、

くそれは、公に引用される時に使われる聖書がもつばら『欽定訳』だった時代、つまり戦後の『改訂標準訳』が出る以前のことであろう。そして、この言葉の引用者として

もっともよく知られた人物は、アメリカの第32代大統領フランクリン・ルーズベルトである。

ある。ルーズベルトは、大統領に就任した直後の演説で、「幻なければ民滅ぶ」と語り、人々に志を高くもつことを訴えた。

幻なければ民滅ぶ

1933年は、アメリカにとつて、また世界にとつて、どんな年であったか。ヨーロッパでは、ワイマル体制への不満から、ドイツに国家社会主義が台頭した年である。ふたたび戦争の影が濃くなり

はじめていた。ルーズベルトはしかし、国内にさらに大きな困難を抱えていた。大恐慌である。4年前に始まったウォール街の大暴落によって、金融は壊滅し、貨幣価値は下がり、人々は職を失い、税金は上がり、購買力は失われ、予算は削減され、貿易は凍結

75年前のアメリカは

時は1933年の3月4日、ちょうど75年前の今週で

はしたが、国内にさらに大きな困難を抱えていた。大恐慌である。4年前に始まったウォール街の大暴落によって、金融は壊滅し、貨幣価値は下がり、人々は職を失い、税金は上がり、購買力は失われ、予算は削減され、貿易は凍結

はしたが、国内にさらに大きな困難を抱えていた。大恐慌である。4年前に始まったウォール街の大暴落によって、金融は壊滅し、貨幣価値は下がり、人々は職を失い、税金は上がり、購買力は失われ、予算は削減され、貿易は凍結

彼が最初に国民に訴えたことは何か。それは、「改革にはヴィジョンが必要だ」ということである。人々の熱意を一つにまとめるためには、共通の夢を掲げることが必要である。そして、「幻なければ民滅ぶ」という言葉をもって彼が提案したのが、「新規巻き直し」いわゆる「ニュー・ディール政策」であった。

■ 共通の夢を掲げて

湯浅は、当時の日本人としては珍しく、二つの世界大戦をともにアメリカで過ごした人であるが、この33年には京

都帝国大学教授だったので、日本にいたことであろう。だが、ルーズベルトの言葉は、新聞や雑誌を通して彼のものにも届いていたに相違ない。だから彼は古い英訳聖書のままこれを記憶し、日本語に直して使ったのである。

75年前のアメリカと同じように、われわれの国は今も閉塞感が強い。改革の必要は叫ばれるが、その労苦を担う者は少ない。志を高く、共通の未来に向かって、前進をしようではないか。

(もりもと・あんり)